

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075500548		
法人名	有限会社ウェルハート		
事業所名	グループホーム幸生園		
所在地	宮若市龍徳1488番地		
自己評価作成日	令和5年1月9日	評価結果確定日	令和5年1月27日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php</a>
----------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズン		
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号		
訪問調査日	令和5年1月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

終わりの見えない長引くコロナ禍の中、今年度は3年ぶりに近隣小学校との交流会を再開できた。オンラインでの交流会という新しい試みを実現させ新たな可能性が広がった。今後は更に発展させてオンラインの活用を進めていきたい。訪問看護ステーションとの連携も丸8年を迎え、家族からの看取り希望にもスムーズな対応が可能となり看取り例も6例にまで増えた。看取り以外にも入院回避や医療機関からの早期退院が可能になった。膀胱の排尿障害が悪化し発熱を繰り返していた入居者にはバルーン留置の対応も可能になり症状の改善につながった。今後も多業種協働で様々な状況を抱える認知症の方の支援を行い、認知症になってもまだまだやれる！そんなグループホーム運営を目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

玄関に理念の「明るく 優しく 元気よく」を掲示し、職員は優しい声かけひとつで入居者の言動が変わることを日々実感し、年2回の自己評価で理念の実践について振り返っている。入居前後の暮らしぶりを全職員で共有し、「自分は必要とされていない」との思いを察し、本人のできることをお願いしたり、「怒らんで聞いてください」には傾聴に務めている。かかりつけ医や訪問看護との円滑な連携で2年間で3名の看取りに関わり、管理者は今回初めて他市の泌尿器科を訪問し情報を交換するなど、さらなる医療と介護の連携に取り組んでいる。昨年小学校から申し出を受けて再開した交流はオンラインであったが、3年生の楽器演奏やクイズを楽しむとともに、認知症の理解を深める好機となり、交流があった幼稚園の保護者だったことがきっかけで入職した職員もあるなど、地域に密着したサービス展開を促進している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 さくら棟／グループホーム 幸生園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「明るく 優しく 元気よく」を理念に掲げ、本人そして家族に「ここに来て良かった」と思ってもらえるサービスを全職員で実践している。	玄関に理念を掲示し、年2回実施している自己評価で、理念の実践について振り返っている。職員は、優しい声かけひとつで入居者の言動が変わることを日々実感している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の町内会に加入し回覧板を回してもらっている。清掃活動にも参加し、そのような場で園の状況などの情報提供や地域の方の意見などをもらっている。	地域の一員として参加している町内会の清掃活動は、恰好の情報交換の場となっている。昨年は地元小学校3年生が社会科見学の一環としてホームに立ち寄ったり、小学校から申し出を受けて再開した交流はオンラインであったが、3年生の楽器演奏やクイズを楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	長引くコロナ禍で小学校との交流会も中止が続いていたが、3年ぶりにオンラインを活用し再開する取り組みを行った。子供たちに認知症の方との交流の機会を提供している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	長引くコロナ禍でリアルな会議は開催できず議事録の配布に留まっているが、写真を活用したり、SNSを活用し状況を報告している。	令和4年度も入居者の暮らしぶりや運営状況などを家族代表や民生委員、地域包括支援センター職員に書面で報告している。参加者から意見を伺うためにも、感染状況に配慮しながら、地域公民館での開催を検討予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月、居室の空き状況を報告している。入居者の紹介などの相談も地域包括支援センターを通して行っている。生活保護の方も入居しており保護課の担当者とも月1回連携をとっている。	日頃から居室状況を報告し、コロナ禍で施設入居を控える傾向にあるなどの情報を得ている。昨年は入居者が入院先で新型コロナウイルスに感染したり、家族が感染し濃厚接触者となった職員はあったが、クラスター発生はなく報告に至らなかった。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束排除の基本方針を整備し、身体拘束禁止となる具体的な行為11例を中心に身体拘束はなぜいけないのかという意識づけができるよう取り組んでいる。	身体拘束適正化会議や動画研修で具体的な拘束内容を周知し、行動を抑制する声かけはその場で注意している。家族の了解を得て、在室時はセンサーで転倒を防止し、帰宅願望にはじっくりと話を聞いたりその入居者だけに対応するなど、気持ちに寄り添ったケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修機会の他、園では週1回の往診や訪問看護、週5回の訪問リハビリなどで外部の人間が常に出入りしており、虐待防止の意識を高めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	身寄りのない方の入居も成年後見人をつけることにより積極的に受け入れており制度の活用を行っている。	包括支援センターからの依頼で、成年後見制度を利用して緊急入居した入居者もある。日常生活自立支援事業や成年後見制度に関する資料を整備し、今後も親族の状況に応じて制度の活用を関係機関と協議する予定である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は具体例を交え、丁寧な説明を実践している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱を設けており、家族の意見や要望をお願いしている。	ブログなどで行事等の写真をタイムリーに掲載したり、個別に写真や生活状況、健康状態や行事への参加、連絡事項などを記載したホーム便りの発行で、家族の要望や意見の表出を促している。利用料の支払いに来所される家族から、「写真で安心する」との意見を頂いている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や提案を連絡ノートを通して周知し現場のケアに反映させている。	感染予防対策として、連絡ノートを活用して職員の意見や気づきを共有し、炊飯器や掃除機が購入されている。管理者は、大雪で面談室に泊まり込んだ際、エアコンが稼動しないことが分かり買い替えたと話している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の自己評価を実施し、自己の仕事への取り組みを振り返ると同時に、評価に応じた査定により昇給や賞与に反映している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	希望休制度を設け職員の自己実現の機会を提供している他、育児との両立を頑張る職員には保育園等の送迎のためのシフト調整や学校行事などの際の優先的な希望休取得などに努めている。	30代～70代の男女の職員が民間求人サイトなどで入職し、個々の状況に応じてパートや夜勤のみなどで勤務している。面接時に聞こえた笑い声で入職したり、交流があった幼稚園の保護者だったことがきっかけで入職した職員もあり、スマートフォンでオンライン研修を受け、シフトの希望や急遽の変更が叶い、働き易いと話している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	法人代表者や管理者自らが手本となって入居者への接遇に配慮し、職員等へ意識づけできるよう取り組んでいる。	再開した地元小学校とのオンライン交流会は、3年生が認知症の人でも色々できると理解する好機となっている。入居者と職員の人権を守るために、家族に暴言があり、自分より弱い入居者にコーヒーをかけるなどの行為があった方に退居(入院)をお願いしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修では動画研修を活用し時間の制限なく学べる機会を提供している。外部研修では本人のスキルアップを目指し研修選定を行いレポート作成の支援など協力体制も整えている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	GHみやわかに参加しているが現在コロナ禍のため全体での活動は休止中。得たい情報があれば積極的に個別に連絡を取り情報交換を行っている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には本人面談の機会を設け、事前にお互いの顔を知ることによって関係づくりがスムーズに進むよう努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の相談時から園の特長や強み、できる事・出来ない事など説明には時間をかけている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	これまでの事例を踏まえ園の特長や強みを説明し、家族が求めていることが支援可能かを見極めながら判断している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食器洗い、モップ掛け、テーブル拭き等それぞれの入居者ができることを見つけ自分たちが役に立っているという自信を持って暮らせるよう支援している。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	帰宅願望や訴えの強い入居者の対応には家族にも参加していただき、園と協力しながら情報共有して取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	帰宅願望の強い入居者の家族に協力をしていただき、仕事が休みの土日に電話で本人の訴えを聞いてもらう等し、家族との関係が途切れないよう支援している。	昨今の状況から家族との面会は中止しているが、オンラインでの面会を支援したり、窓越しにスマートフォンの曾孫の写真を見せに来所する家族もある。馴染みの訪問美容と訪問理容の使い分けや毛髪染めを支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食堂での座席配置などには利用者同士の関係性などを考慮し、楽しく過ごせるような支援を行っている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	以前にサービスを受けていた入居者の家族から、今度はその妻の入居の相談を受けることがあった。(サービス終了後も交流が続いていた。)		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分の思いを上手く伝えられない場合が多いが、そのような場合でも本人が答えられる話題からヒントを得ながら、意向の把握に努めている。	入居前の生活歴だけでなく、元気な時に歌を歌っている動画を新任職員に見せるなど、入居後の暮らしぶりを全職員で共有している。「(囲碁相手が来所していた)昔はよかった」の声に、職員が相手をしている。「自分は必要とされていない」との思いを察し、本人のできることをお願いしたり、「怒らんで聞いてください」には傾聴に努めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族、ケアマネ、ソーシャルワーカー等関わる人それぞれからの情報収集に努め把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別の介護記録には本人が言った言葉は忠実に記録し、心身状態を表す動作・行動なども細かく記録する。それを共有し現状の把握に努めている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族に漠然と意向を聞いても普段の様子を把握できていないため意見が出ない。こちらから家族の意向を引き出せるようコミュニケーションを重ねて家族の口から出るワードを参考に反映している。	介護支援専門員と担当職員で、入居者や家族の意向に沿った原案を作成し、連絡ノートで意見を求めている。週5回の訪問リハビリで上下肢の屈伸運動や歩行訓練を組み入れたり、「ここを辞めて帰りたい」には、思いを受け止めながら、全職員で同じ対応を実践している。	家族が具体的な意向を表出するために、ケア内容を数値化したスモールステップの短期目標の設定で、モニタリングを容易にするなどの工夫を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録は手書き形式なので、その場で気づいたこと様子など細かく記録することができている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	通院支援など家族の対応が困難な場合は対応したり、制度利用の手続きや申請業務など家族の負担軽減も支援している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	以前は地域ボランティアを活用し将棋や囲碁を入居者が楽しめる支援をしていたがコロナ禍以降実施できていない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	その都度、適切な医療が受けられるよう主治医の往診以外にも専門医（精神科・泌尿器科等）の受診ができるようサポートしている。	かかりつけ医や訪問看護と円滑な連携を構築し、来訪する専門職に他の入居者の状態を相談することもある。管理者が専門科受診に同行し適切な医療を受けられるように支援しているが、今回初めて他市の泌尿器科を訪問し、情報を交換している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護との連携がありパーキンソン病の方の訪問リハビリ実施や看取り期にある方への手厚い対応、バルーン留置による排尿管理など様々な状況の入居者に対応ができている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	早期退院に向けた取り組みに力を入れている。連携室職員との関係も良好で入院時は家族の意向をしっかりと伝え、必要に応じ家族と病院へ出向いたりし早期退院に取り組んでいる。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	園、家族、主治医、訪問看護の連携により終末期の対応も手厚く行っている。これまでに6例の看取りを実施。	入居時や状態に応じて看取りの意向を確認し、かかりつけ医や訪問看護との連携で、2年間で3名の看取りに関わっている。管理者は家族と専門科受診に同席し、病状や今後の経過について説明を受け、ホームでできる限りの経口摂取を支援している。家族の「母に怒られたことはなかった」との言葉に、状態変化を受け入れられなかった思いに触れている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訪問看護ステーションと24時間医療連携体制があり、急変や事故発生時には指示を受け対応できる環境を整備している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施している。	夜間想定訓練では、車イスの入居者も広い園庭の駐車場に避難しているが、車イス移乗介助の時間や避難後の点呼が課題となった。災害時の指定避難場所は熟知しているが、車イスを押して避難できないのが現状で、飲料水を確保し、感染予防グッズを備蓄している。	備蓄管理台帳で、食料品や感染予防グッズの過不足等を管理するとともに、培った医療連携や地域交流を組み入れた自然災害や新型コロナウイルス感染症発生時の事業継続計画の策定を期待します。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員、入居者、男女関係なく「お父さんお父さん」と呼ぶ入居者には名前以外に「お母さん」と声をかけることでコミュニケーションが取りやすくなる等一人ひとりにあった対応をしている。	氏名で呼称したり、ユーモアでうちとける入居者もあり、TPOをわきまえて対応している。調査時再三事務室に来訪し管理者に思いを伝える入居者に、その都度丁寧に応じる管理者から、日頃の対応が伺えた。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者が買ってきて欲しい物を訴える時は要望に応じて対応している。間違っただ判断や困難な要求の場合もあるが、その中でも希望が実現できるよう支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝のラジオ体操、昼食前の口腔体操は全員で行うが、それ以外は自分の意思に基づいて自由に行動できるように安全を確保できるよう見守りや声かけなどで支援を行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理容と訪問美容を入居者の希望により使い分けている。カラーがしたい方の要望にも応えられるようにしている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の楽しさを提供するため厨房専属の職員を採用し手作りの食事を提供している。盛り付けにも配慮し目でも食事が楽しめるようにしている。	ブログに子どもの日はちらし寿司に柏餅、正月はおせちと、目でも楽しめる食事がアップされている。個々のペースで完食する入居者が殆どで、時間をずらし居室で40分かけて食事を介助する入居者もある。食器拭きをお願いしたり、テーブルを拭く職員に「私がしようか」と声をかける入居者もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分摂取が進まない方にはお茶ゼリーを作って提供したり、嚥下状態の悪い方には主治医と相談し、例えば具なしの茶碗蒸しを作ったりなど、その方に合った支援をしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	うがいが出来ず飲込んでしまう方にも口腔ケアが行えるよう、飲み込んで問題ない食物由来の歯磨き粉を使うなど工夫し口腔ケアの支援を行っている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄チェック表の活用により排泄パターンを日々記録しており、入居者の排泄パターンを把握し誘導のタイミングなどに役立て失敗や自立に活かしている。	トイレの3枚ドアを使い勝手が良いアコーディオンカーテンにしている。うろろうしたり立ち上がるなどのサインでトイレに誘導したり、夜間頻尿にはポータブルトイレを設置している。訪問看護との連携でバルンカテーテルを留置した入居者もあり、夫々の状況に応じて支援している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	適切な水分摂取と活動を心がけ予防に努めている。主治医と連携し緩下剤や坐薬を使う場合や必要に応じ看護師による浣腸を施している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週2回、曜日を決めて入浴を実施している。入浴拒否があれば順番を工夫したりしながら、全員が入浴できるよう支援している。	広く清掃の行き届いた浴室には広めの個浴槽やシャワーチェアが設置され、入浴を楽しんでもらいたいと冬至には柚子湯を職員が準備している。同性介助の希望には応え、「入らん」には声かけを工夫している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室のカーテンを遮光カーテンに変更し睡眠に適した居室環境を提供している。その他、マッサージ器の利用も支援しておりリラックスできる環境を提供している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	専任の薬剤師がおり入居者の服薬管理を行っている。服薬支援における助言や指導を受けている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者の誕生日には園からのプレゼントを用意し、記念写真とプレゼント贈呈を実施し写真は家族へ送っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍のため遠出する外出は控えているが敷地内に花壇のある中庭があり、おやつを外で食べたり、気分転換に外に出たりと日常的に戸外に出る機会を作っている。	コロナ禍で、笑顔がなくなり家族とのオンライン面会にも反応がなくなった入居者は、受診後の彼岸花の見学で穏やかな顔になっている。入居者同士のぶつかりも多くなっている昨今、外の空気に触れ気分転換をしてほしいと、園庭の散歩を支援している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望に応じ手元に少額のお金を持たせる支援をキーパーソンと協力して実施した。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の協力を得て週末に電話をかけてもらう支援や年賀状の返送では絵の得意な方には自分で通信面を作成してもらえようような支援をしている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のリビングでは加湿器を設置し乾燥に配慮している。壁には季節の飾りを施したり、音楽を流したりなど居心地よく過ごせる工夫をしている。	玄関には職員紹介や理念が掲示され、昨年交流が再開した地元小学校から寄贈された3年生の集合写真や鶴を飾りつけたボードを飾っている。テーブルや椅子などが設置され空調が管理された居間の壁には、ユーモアたっぷりの絵手紙様の色紙などが掲示され、職員と一緒にテーブルを拭く入居者の姿もあり、穏やかな暮らしぶりが伺えた。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングでの座席配置は入居者同士の関係性を配慮して決めているが、会話を楽しみたい時は自由に席を移動できるよう支援している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	猫が大好きな入居者の居室には、猫の置物や猫の写真が載った大きなカレンダーを配置し、本人が楽しい気持ちになるよう支援している。	自前やレンタル、ホーム備え付けのベットや大きなクローゼットが設置された居室には、正月飾りの前で撮られた記念写真が掲示され、テレビやテーブル、椅子が持ち込まれ、居心地良い居室となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー及び廊下には手すりを設置しているので、支えがあれば自立歩行可能な方は自分の力で安心して歩行することができている。		